

かきつけてつかはしける、

よみ人志らず

うつろはぬなに流れたる河竹のいづれのよにか秋をゑるべき

〔多識編三〕簾竹和名今按加和志呂太計

〔重修本草綱目啓蒙二十六〕竹

一種竹長ジテ全ク粉アリテ霜ノ如キ者ヲカシロダケト云是簾竹ニシテ淡竹ノ一種ナリ、

〔古今要覽稿草木〕かはしろ竹・かしろ竹

かはしろだけ一名かしろ竹は、漢名を簾竹一名水白竹といふ、これ卽はちくの一種なり故に其状すべてはちくと一様にして、たゞ全身白粉ありて、霜のごときを異なりとす。○下略

〔撮壊集中〕漢竹

〔古今要覽稿草木〕漢竹

○下

漢竹は、和漢通名なり、江村如圭は漢竹伊豫に生じ以て桶に入るべしと、鶴本草 いひ、谷川士清は漢竹桶となすべきもの、豊後よりいづると、葉訓 いへり、また相模の金子村に産するものこれと同種なるべし、おもふに此種は蓋しま竹のその土地に應じてよく生育し、其幹極めて長大にして、圍み二尺餘にいたるものにて、別種にはあるべからず、また竹譜詳錄に、籠葱竹生羅浮山因名羅浮竹、竹皆十圍といへるも、大略此類なるべしとおもひしに、籠葱竹は惠陽志に、葉如芭蕉大長及一丈といひ、番禺志に、籠葱竹葉大如手徑二三尺といふ時は、これとは別種なり、扱佐藤成裕壯年の比遊歴せし時、肥後の小國といふ所より、二里ばかり山間の人家なき所を過て、豊後の肥田といふ所に行しに、その間に竹村あり、その名は忘れたれども、すべて其所はいと高き土山にして、其山頭に大竹幾萬幹群り生じて、水田はなく、たゞ畠のみ少しはありといへ共、其畠にも夏の比はおのづから筍を生じて、拔とらざれば忽ちに竹藪となる、かく竹の多き處故に、土人の家居は